第４回　福知山市新文化ホール整備基本構想・基本計画検討委員会

会　議　録【概要版】

【日　時】 令和４年 10 月 24 日（火）14:00~16:00
【場　所】 福知山市厚生会館　中会場
【出席者】（委　員）11 名、内１名オンライン参加
（事務局）文化・スポーツ振興課　西村担当課長　西村課長補佐　増田主事
阪本主事
シアターワークショップ　伊東、佐藤、真木、
石井、長谷川（オンライン）

１　開　会
２　開会挨拶
３　協議事項
（１）前回委員会のまとめと質問事項の確認
（２）基礎調査の補填
市民ワークショップの報告（第１回・第２回）
Web アンケートの報告
市民交流プラザの開館と活動状況の変化
（３）福知山市新文化ホール基本構想（案）
４　その他
５　閉会

【議事】
事務局　：委員長がオンライン参加のため、副委員長に議事進行をお願いする。

（１）前回委員会のまとめと質問事項の確認
〇事務局より説明
（２）基礎調査の補填
〇事務局より説明
委員　　：ワークショップ報告の中に、「若者が市外へ出ていってしまうこと」への改善策として、新文化ホールを町のシンボルとして整備することで対策するという意見が挙がっているが、少し次元が違う話なのではないか。
事務局　：ワークショップでは、「新文化ホール」で何ができるか、どう改善できるか、と

いう前提でアイデアを出してもらっている。このご意見を出された参加者も、新文化ホールにつなげてアイデアを出された。

副委員長：第３回以降のワークショップについては今後の検討委員会で報告されるのか。

事務局　：第３回以降は基本計画に反映する内容となるので、次回以降の検討委員会にて報告する。

副委員長：Web アンケートについて何か意見はあるか。

委員長　：若い世代の回答者が非常に少ない。若い世代が文化活動の中心になることが非常に重要な中、回答者の世代の偏りについて留意する必要がある。

委員　　：計画の中で若い世代の意見をどう拾っていくか考える必要がある。次の世代が使う施設として、若い方が集まるイベントの際にアンケートに答えてもらうなどの取り組みがあったほうが良いのではないか。

事務局　：ワークショップの前に各高校へ、ワークショップとアンケートへの協力を依頼したが、参加や回答はなかった。大学生や高校生を対象としたワークショップを別に実施する予定である。

委員　　：今の高校生は、文化的なものに興味はあっても、基本的に受動的な傾向がある。何かこちらから働きかけをしてあげないといけない。ワークショップは貴重な場であるため、大切にするべきで、意見をどう反映していくかが重要である。

委員　　：高校生にも指導者から質問すれば、様々な意見が返ってくるのではないかと思う。

委員　　：市内でプロのフルート奏者によるコンサートを実施した際、市内の吹奏楽部が参加した。コンサートの後に実施したアンケートで、吹奏楽部の部員から、喜びに溢れた意見があげられていた。良いものを見れば、また見たいと思うが、現在の福知山市ではその機会がない。まずは芸術に触れる機会を提供する必要があるのではないか。

副委員長：市内には多くの高校も、公立大学もあるため、若者の意見を吸い上げながら、進めていただきたい。

（３）市民交流プラザの開館と活動状況の変化

副委員長：市民交流プラザの利用状況について会議資料 22 ページの利用件数の表で、市内の地域公民館のうち掲載されていない施設があるのはなぜか。

事務局　：地域公民館がそれぞれ年間の利用結果を出しており、教育委員会がまとめた報告をもとに集計しているので、数値があがっている施設のみ集計している。

３　福知山市新文化ホール基本構想（案）

〇事務局より説明

【第１章】【第２章】

副委員長：　基本構想（案）６ページに、「環境負荷を低減するため、ZEB 等の導入を含めた

環境問題への配慮も求められています。」とあるが、ZEB は具体的にどのように導入していくのか。

事務局　：近年、環境にやさしい施設が求められている。環境には十分に配慮して検討を行う。整備方針にゼロエネルギー、再生可能エネルギーについて記載しているので、このあたりを含めて検討していきたい。

委員　　：６ページに「施設計画において継続性や長期的な視点は失われがちですが、」とある。継続性や長期的な視点が最も重要なことだと思う。この後に続く基本構想の中では長期的な視点が非常に重要であると書かれている中で、「失われがち」と記載する理由が不明である。

事務局　：検討する。

委員長　：委員会が依頼し集計された市民交流プラザの利用・活動の状況で、ある程度の防音設備があり文化活動に利用できる部屋が 2 室あり、そのうち面積の小さい部屋の利用が大幅に増えている。主に講演・会議・研修に使われている 3 室と比べると、練習の利用が多い。こういった部屋の需要が高いことを考えると、新文化ホールにおいても小規模な防音の練習室が必要とされる可能性があることがわかる。より詳しく見ていくと、どのような部屋が必要か、どのような活動が今後増えていくのか、わかっていくだろう。この報告をもとに次の段階に進むのが良いのではないか。

【第 3 章】

委員　　：「つくり、つながる」という言葉を追加していただいたことで以前の案と比べわかりやすくなった。しかし、「アドバイザー」という言葉に違和感を覚えた。外からアドバイスする印象を受ける。「コーディネーター」等、同じ場所に立って一緒に考える人の方が良いのではないか。変更が難しい場合は本文中も「アドバイザー等」と記載するのが良いのではないか。

委員　　：「管理運営」はあるものをどう使うか、という部分であり、「基本的な役割」は施設で積極的に担っていくことを表すものである。その 2 つが混ざってしまっている。　福知山市としては子育て支援、若者の活動する場所がないという部分がポイントだろう。それを具体化していくには、全体的に弱いという印象を持った。

「アドバイザー」というより、中にいる意識を持ってコーディネートするという意味で、「コーディネーター」という文言が良いのではないか。自分なら役割の 1 番目は体験・鑑賞、2 番目は特筆すべきこと、3 番目は交流、4 番目は創造、最後は安全・安心と書く。「安心・安全」と定住人口の減少は関係のある問題である。一見わかりやすいようで、何をするのかはっきりしないという印象を受けた。

32 ページの管理運営の考え方にある「２）若い世代が中心となって人と人とを「つなぐ」架け橋となるための市民参加の推進」と「３）過去・現在・未来へ

と続く「つながり」のきっかけをつくるための日常的に居心地の良い空間づくり」については、もっと積極的に会館が実施するニュアンスで書いたほうが良い。

何が重要で、何から実施していくのかということを、重要な部分が運営者にわかるように書いたほうが良い。

委員　：市の内部で「コーディネーター」を置くということを打ち出すことは非常に重要である。市内で文化活動を行っている方々は多いので、そういった方々がコーディネーターをするのが良いのではないか。

委員　：新しいホールには様々な方が訪れることになるので、マッチングが重要である。人と人をつなぐ仕組みを考えていただきたい。

委員長　：説明の文章が少し冗長なので、全体的に簡潔に、わかりやすくできると良い。

【第 4 章】

委員　：プロの公演と厚生会館で行われている平土間での展示利用というのは相反するのではないか。福知山市では、どちらを主眼に置くのか取捨選択をする必要があるだろう。両立することは可能なのか。立地に関しては、浸水被害や駐車場のことから、三段池公園しかないのではないかという意見が多い。

委員　：前回委員会で、客席規模について、1,000 席からにすべきと意見をした。大は小を兼ねるが小は大を兼ねない。これから市の人口が増えることはないのか。優れた文化に触れることで文化が育まれていくことを考えて、長期的に見た上で、果たして 800 席を上限に検討するということで良いのか。敷地の問題等、他に選択肢がない状況となった際に席数を減らして検討すれば良いのではないか。

委員　：現実的に、1,000 人規模のホールを稼働していけるのかという問題がある。中身の充実を重要視するのが良いのではないか。

ワークショップの意見は基本構想に反映されるのか。

検討委員会は基本計画までを議論するということでよいのか。

30 ページの交流機能の部分に「ユニバーサルデザイン」「バリアフリー」とあるが、「障害のある人もない人も誰もが気軽に訪れることができる」というような文言が良いのではないか。

建設予定地について、相応の時間を要しても新たに建設地を確保する可能性はないのか。また、31 ページの建設地選定の観点に、その他として、「自然災害の危険性の有無」とあるが、具体的な懸念点を教えていただきたい。

事務局　：ワークショップの第 1 回、第 2 回は基本構想に、第 3 回から第 5 回は基本計画に反映するように考えている。

基本計画の次は基本設計段階に入る。本委員会での検討は基本計画までとしているが、その後の基本設計段階以降も何らかの形で見守っていただけるようにできないかと考えている。

「障害のある人もない人も」という文言については追記を検討する。

建設地は、基本計画で具体的に複数の用地を選定し、複数のパターンを提示させていただいた上でご検討いただきたい。

自然災害の危険性については、急傾斜地の問題や過去の災害の状況等を踏まえて検討する。

委員　：客席規模について、興行のみを考えるのであれば、民間の主催者は 1,000 席程度が必要な例は多い。だが、アーティストは、興行的な観点以外の理念も持っている。設備のことで言えば、機材を充実させるのは現実的には難しいだろう。様々な要素をもとに検討されるので、客席規模が大きいから来てくれる、小さいから来ない、ということではない。客席規模の大きなホールを、市民全体の合意を持って建てることができるのであれば、ある意味では大は小を兼ねるということになるが、そうはならない可能性が高いだろう。会館は来場者数より客席の何%が埋まったかということで判断されてしまうので、客席規模の大きなホールを作ることは難しいだろう。個人的には 500 席から 800 席ほどのホールが妥当であると考えている。規模を考える際、ここでどういった事業をやっていくのかということと関係する。「良い事業をやっている」と思われるために、有名人を多く呼ぶというのも一つの手だが、他にどのような手がとれるかということが最も重要なことである。

委員　：演劇の場合は 800 席では興行は難しい。若い方が公演を見て、感動し、自分の活動に活かしたい、自分も加わっていきたい、と思ってもらえる機会にどう投資をするか。有名人の公演を見て「楽しかったね」だけではその先になかなかつながらない。中規模のホールを作り、練習の場の不足に対応する創造活動機能を充足させていくことにスペースを割いて投資するという手がより適しているのではないか。交流を通じて生まれたものが即時的に効果をもたらすのではなく、5 年、10 年、20 年かけて現れていくものである。

委員長　：長持ち、長続きするという視点が非常に重要である。事業、客席数、立地も、そのような視点で考えていく必要がある。日本中、全国各地の公共ホールで老朽化が問題となっている。長い目で見て、市の人口、財政をトータルに踏まえる必要がある。消極的にではなく、市民が文化に関わり続けていくという点で積極的に、基本構想を考えていく必要がある。そういった点で現在の案はある一定の方向性を示しているのではないかと思う。細部については基本計画の段階で示していけば良いのではないかと考えている。

【第 5 章】

委員　：施設のハードから考えることになりがちだが、事業は、市全体のことを考える必要がある。施設の機能というのはそこに人がいるから機能が必要とされる。施設に来てもらうだけではなく、アウトリーチ事業等、施設の外の様々な場所で交流等を行っていくことも施設の役割である。ハードとしての運営と、事業としての

運営は、分けて考えるのが良いのではないか。

副委員長：中丹文化会館で様々なニーズをつかんで事業を行っていることに感心している。そのようなことが重要だろう。

委員　　：33 ページの運営主体の考え方について、市民交流プラザがどうして直営となったのか、理由を伺いたい。もう一点、「社会包摂の観点から」とあるが、社会包摂という表現は意味が大きすぎるため、「障害者雇用の拡大の観点から」のような表現が適しているのではないか。

事務局　：市民交流プラザは、図書館が複合されていること、公民館であること等が直営の理由であると思われる。「社会包摂の観点から」という文言については、検討する。

副委員長：今後の進め方についてご意見はあるか。

委員　　：基本構想案は文言整理をしていただいて、次回 5 回目を迎えるが、スケジュール案から言うと、もう少し検討が前に進むよう、事務局に進行していただきたい。

事務局　：今回ご意見いただいた基本構想（案）について、いただいたご意見を修正した上で委員長、副委員長にご確認いただき、パブリックコメント等を実施したい。次回検討委員会では基本構想(案)の最終を見ていただいて、次回以降の検討委員会では基本計画に関してご検討いただきたい。

4　その他

事務局　：次回検討委員会日程については、改めて日程をお知らせする。

5　閉会

以上